二〇一九年度　入学試験問題

文学部A方式Ⅰ日程・経営学部A方式Ⅰ日程・人間環境学部A方式・GIS（グローバル教養学部）A方式

二限　国　語　（60分）

〈注意事項〉

一　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

二　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

三　志望学部・学科によって解答する問題が決まっている。問題に指示されている通りに解答すること。指定されていない問題を解答した場合、採点の対象としないので注意すること。

四　マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

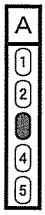
五　問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意

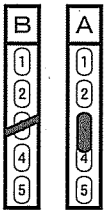
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること（万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと）。

一　記入例　解答を3にマークする場合。

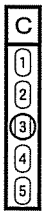
(一)　正しいマークの例



(二)　悪いマークの例



枠外にはみださないこと。



○でかこまないこと。

二　解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三　解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四　問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

●文学部を志望する受験者は、問題〔一〕〔二〕〔三〕に解答せよ。
●経営学部・人間環境学部・GIS（グローバル教養学部）のいずれかを志望する受験者は、問題〔一〕〔二〕〔四〕に解答せよ。

〔一〕 つぎの文章は一九六〇年代以降の日本の大衆音楽文化について論じたものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

時代が下ってくると、古き良き童謡をまるごと抱え上げ、その重要性と継承を訴えるような言説が徐々にサンケン[a]されるようになります。なかでも一九六九年六月九日の朝日新聞朝刊に掲載された社説は極めて象徴的なテキストと言えるでしょう。

子どもたちの世界から童謡が消えてしまった。……かつては日本全国の子どもたちに歌われていた数々の童謡が、少しずつ過去の遺物となりつつある。……こんな古い歌はもう子守歌にもならないのだろうか。そうだとすると、日本のある時代の姿と心をつたえる情報の一つが、完全に失われることになる。むかしといまとを比べて、もの思う姿勢も生れない。……童謡は、疑いもなくわれわれのもった一つの文化財なのであり、それを次の世代につたえることは、われわれの義務の一つではないだろうか。（傍点引用者）

日本の心を伝えるものとして童謡を位置づけている点、その衰退・喪失を危惧している点、さらに継承の必要性を訴えている点などにおいて、今日における童謡イメージとかなりきれいに整合するものだと言ってよさそうです。

概ね一九六〇年代の末頃から次第に、童謡を「古い歌」として暗黙裏に前提した上でその衰退を嘆く、というタイプの言説が目立つようになります。しかし、では[1]童謡はいったいなぜこの時期に「古い歌」に〝なった〟のでしょうか。この時代にはいくつかの特徴的な世相の動きが生じていました。それらを順に確認していきましょう。

最初に取り上げたいのは、「明治百年」を端緒とする社会全体の変化です。実は朝日新聞の社説が登場する前年の一九六八年は、明治元年である一八六八年から起算してちょうど百年目に当たる記念の年でした。この「明治百年」は、文芸評論家の小野俊太郎がその名も『明治百年』と題された本のなかで指摘しているとおり、単に歴史上の節目の年であったというだけに留まら

ず、「近代化後の「自分たちは何者か」とか「日本とは何か」を問い直す動きを伴って」いました。特にこの年を一つのテンキ[b]として、新しさの追求をいったん停止し、以前からあったものを尊重したり保存したりする気運が各方面で高まっていったことは重要です。

そうした社会気運の高まりと連動するかのように、一九七〇年に入ると国鉄(当時)による「ディスカバー・ジャパン」のキャンペーンが始まります。このキャンペーンを通じて、それまで等閑視されがちだった片田舎の風景は「美しい日本」として次々に再発見されるようになりました。[2] さらに一九六〇年代末から七〇年代初頭にかけては、いわゆる「日本人論」ブームも起こっています。社会学者の市川孝一は「日本人論の社会心理史の試み」と題された論文のなかでその理由を、経済大国化した日本が次に目指すべき目標を喪失してしまったことに求めています。「目標喪失の不安から生じた「自己確認」の要求が、〝日本人再確認の衝動〟として日本人論ブームをささえた」、というわけです。

「明治百年」と、それに続く「ディスカバー・ジャパン」や「日本人論」ブームとを、直接的な因果関係の線で結ぶのは少々強引かもしれません。しかし一連の現象の背景には、同質の世相、つまり従来は意識していなかった自分たちのルーツや、あるいは自分たちがこれまでに辿ってきた道程を改めて振り返り、また再評価しようとする姿勢を認めることができます。そうした時代のチョウリュウ[c]のなかにあって、それまで排除の対象にさえなりかねなかった古い童謡(あるいは唱歌も)は、その古さゆえに保存すべき価値のあるものとして見出されていったのだと考えられます。

「明治百年」とそれに続くいくつかの現象は、社会全体に広くツウテイ[d]する大きな世相の変化でした。続いてはもう少し視野を絞って、当時の音楽文化に見られた変化をある程度限定的に確認していきましょう。音楽社会学者の小川博司は「六〇年代の音楽」と題された論文のなかで、[3] 当時の音楽シーンの概略を次のように説明しています。

一九六五年秋にTBS系列で始まった『歌謡曲ベストテン』以後、各局で同種の番組が始まり、テレビを中心にしたヒット曲作りが本格化した。若手歌手を中心にした同種の番組が毎日のように流されるため、一曲の流行周期は短期化し、ファン層は低年齢化していった。この内容と流行周期に追いついていけない中高年層がすがりついたのが、「なつかしのメロ

ディー」と演歌である。

小川がここで述べている流行周期の短期化やファンの低年齢化といった変化は、もちろん当時の歌謡曲に関するものであり、決して童謡にそのような変化が見られたというわけではありません。むしろ童謡は、そうした歌謡曲の変化について行けなくなった中高年層の避難先として、小川の挙げるなつメロや演歌と非常に似通った文脈で受容されるようになった、と考えることができそうです。

実際、この時期のなつメロブームや演歌の隆盛と童謡との間には、ある程度の連関性を指摘することができます。たとえばなつメロブームについては、東京12チャンネル(現・テレビ東京)で一九六八年に始まった『なつかしの歌声』がその牽引役であったことが知られていますが、当時のブームを詳細に研究した近藤博之が「戦後日本の『なつメロ』の成立とブームの特質に関する研究」という論文のなかで報告しているところによると、同番組では年に数回のペースで童謡や唱歌の特集が組まれており、かつ、その際に時折ではあるものの「心のふるさと」といった表現が使われていたことが分かります。『なつかしの歌声』が扱っていたのはもっぱら昭和初期から昭和二〇年代までの流行歌でしたが、そうした性格の番組のなかに童謡・唱歌が(部分的にではあれ)組み込まれていた事実からは、双方の受容層がある程度重なっていたことが推知されます。

しかし、そんななつメロ以上に興味深いのが童謡と演歌との関係性です。戦後日本の演歌をめぐっては、音楽学者の輪島裕介による『創られた「日本の心」神話』という優れた研究書があるのですが、同書のなかで輪島はいくつもの言説を引きつつ、今日の演歌が「日本人の心」といったイメージと強く結び付けられる傾向にあることを指摘しています。また同時に演歌は、私たち日本人が「失ってしまった」ものであり、またそれゆえに「受け継ぐべき」あるいは「取りもどすべき」ものとしても位置づけられています。演歌に関するそうした基本イメージは、童謡のそれときれいに重なるものだと言えます。

しかし、この「演歌=日本人の心」という図式は(童謡がやはりそうであるように)決して古くから［　X　］されてきたものではありません。輪島によれば「現在の意味での「演歌」が、ある種のレコード歌謡スタイルを指示するものとして用いられ始めるのは一九六〇年代後半」であり、「なおかつそれが「日本的」ないし「伝統的」なものとして一般に定着するのは一九七〇

年代」だというのです。つまり演歌と童謡は、それが「日本人の心」的なイメージと結び付くようになる時期までも概ね一致しているのです。

ではなぜ、一九六〇年代後半から七〇年代にかけて現在のような「演歌」観[4]が成立することになったのか。輪島の言葉を借りつつその説明を要約すると、以下のようになります。すなわち、「戦後の復興期から高度経済成長前期においては、「明るさ」「豊かさ」「近代」「理性」といった諸価値への信頼と憧憬が「文化」に関わる言説や実践を特徴付けて」いました。しかし「一九六〇年代のある時点」から、「学生や若い知識人の間に、旧来の枠組みでは克服されるべきものであった「暗さ」「貧しさ」「土着」「情念」と結びつく文化表現を審美的に称揚する傾向が現れ」るようになります。そうした動きのなかで、「過去に商品として生産されたレコード歌謡に「流し」や「夜の蝶」といったアウトローとの連続性を見出し、そこに「下層」や「怨念」、あるいは「漂泊」や「疎外」といった意味を付与することで」、今日「演歌」と呼ばれている音楽ジャンルが誕生します。そんな演歌には「抑圧された日本の庶民の怨念」が反映されており、その意味において演歌は「日本の心」となり得た、というのが輪島の指摘です。

ただ、そうしたドロドロとした怨念の歌は決して万人受けするものではありません。暗さや貧しさと結び付いた演歌を「日本人の心」へと特権的に結び付けることには共感できない人々も少なからずいたのではないかと想像されます。果たしてそのためであったのかどうか、一九七〇年代に入ると、《わたしの城下町》(一九七一年)でデビューした小柳ルミ子をひとつの契機として、一部の演歌に「健全化」の動きが見られるようになる、と輪島は指摘しています。「やくざ」や「商売女」とは対極に位置する小柳の登場によって、一部の演歌が「通俗的な意味での「古き良き日本」の風物と重ねあわされてゆき、アウトロー的な逸脱性を後退させる」ようになったのです。

小柳ルミ子を契機として健全化に向かうようになった一部の演歌。しかしそのプロセスは、もともとアウトロー的な性格を与えられていた歌を後から洗浄脱色するという手間のかかるものでした。そうした戦略も決して悪くはないのですが、もう少し要領よく(?)、最初から清純で家庭的な(と誰もが信じるような)「日本人の心」を用意することもできたのではないでしょうか。童謡は、まさにそうしたニーズに沿うものとして持ち出されてきたのではないか、というのが私の見解です。先端的な流行歌

にはついて行けないが、かといってアウトローな出自の演歌もちょっと……。そんな感性こそが、純朴な「童心」に彩られた童謡や、それとほぼ混同されるようになっていった唱歌の再評価を促した、と考えるのはごく自然であるように思われます。

（井手口彰典『童謡の百年』より。文章を一部改変した）

問一　傍線部1「童謡はいったいなぜこの時期に「古い歌」に〝なった〟のでしょうか」とあるが、その理由の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　明治百年を発端とした「日本とは何か」を問い直す動きのなかで、童謡があるべき「日本」にそぐわない、陳腐なものとみなされるようになったから。

イ　近代化を達成して経済大国化した日本社会では、かつて子どもたちに歌われていた歌の内容が古くさいものに感じられるようになっていたから。

ウ　近代化が進展するなかで昔ながらの童謡の人気が低迷した結果として、ある時期から新たな子どもの歌がつくられることがなくなっていたから。

エ　日本人の「自己確認」の要求が高まったことを背景に、童謡などの古くからあるものへの評価が覆り、その古さに価値が見出されるようになったから。

オ　明治百年をきっかけとして日本社会全体の価値観が変化し、この国に古くからあるものと新たに創造されたものが峻別されるようになったから。

問二　傍線部2「等閑視されがちだった片田舎の風景は「美しい日本」として次々に再発見されるようになりました」とはどういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　どこでも同じだと思われていた地方の景色に、実は各地域に固有の美しさがあることが知られるようになったということ。

イ　誰も目を留めなかった何の変哲もない鄙びた景色のなかに日本らしい美があるとして賞賛されるようになったということ。

ウ　それまで知られていなかった地方の絶景スポットが発掘され、観光キャンペーンで喧伝（けんでん）されるようになったということ。

エ　近代化の進展で長らく忘れられていた地方の田園風景の美が、観光化の進展で再び脚光を浴びるようになったということ。

オ　古臭いとされてきた伝統的な地方の名勝が、日本的な美意識にかなうものとして再び人気を集めるようになったということ。

問三　傍線部3「当時の音楽シーンの概略」の説明として**誤っているもの**をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　多くのテレビ番組で若いファンに支持される流行歌があまりに多様化した結果、中高年には受容しきれなくなった。

イ　流行歌が日々繰り返し放送されることによって短期間で飽きられるようになり、つぎつぎと新たな曲が投入された。

ウ　歌謡曲の番組が各テレビ局で人気を集めたことによって、売れる曲を作るために放映を意識するようになった。

エ　演歌や「なつかしのメロディー」は、めまぐるしく変化する流行曲を追いかけきれなくなった人々に愛好された。

オ　当時流行した歌謡曲の歌い手の多くが弱年であったことから、支持する層もおのずから若者が中心となっていった。

問四　空欄 X に入る語句として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　絶対視　　イ　客観視　　ウ　自明視　　エ　問題視　　オ　重要視

問五　傍線部4「現在のような「演歌」観」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　高度成長期までの「豊かさ」を追求する価値観は本来の日本人の心にそぐわないものだと感じていた庶民によって、自分たちの情念を託すものとして作りあげられたレコード歌謡曲が、演歌である。

イ　高度成長期を経て時代の変化とともに失われた、清く正しい日本人本来の心を取りもどし、受け継ぐために、学生や若い知識人がそれを表すものとして生み出したレコード歌謡曲が、演歌である。

ウ　日本人が高度成長期に失った心を取りもどすために、過去に商品として作られた歌謡曲の中から貧しさへの怨念を暗く歌い上げる曲を選別した結果として誕生したジャンルが、演歌である。

エ　高度成長期まで主流となっていた価値観にあきたりなくなった学生や若い知識人が、商業主義を克服して新たな表現を作ろうと、過去のレコード歌謡を参考にして作りあげたジャンルが、演歌である。

オ　高度成長期までの価値観とは対照的なものをかつての歌謡曲のなかに見出し、そこに日本の庶民の心なるものを幻視する流れのなかで、新たな音楽ジャンルとして確立されたのが、演歌である。

問六　二重傍線部「童謡と演歌」について、筆者が指摘するその共通点とは何か。本文全体をふまえ、三十字以上、四十五字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問七　波線部a～dのカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

*後堀河院御位の時、嘉禄二年九月十一日、例*幣に頭の中将宣経朝臣以下、職*事ども参りて出御待つほど、人々、鬼の間に集まりゐて、何となき物語しけるに、台*盤所には内*侍ども、①さらぬ女房たちも候ひけり。渡*殿には、貫*首に従ひたる蔵人ども並びゐて、内も外もなく、さまざまの物語いひ交はすに、少*将の内侍、台盤所の御*壺の楓の木を見出して、「この楓に、初紅葉の1したりし2こそ失せにけれ」といひたりけるを、頭の中将聞きて、「X いづれの方にか候ひけむ」とて、梢を見上げければ、人々もみな目をつけて見けるに、蔵人永継とりもあへず、「西の枝にこそ候ひけめ」と申したりけるを、右の中将実忠朝臣、御*剣の役のために参りて、A 同じくその所に候ひけるが、この言を感じて、「このごろは、これほどの事も心B とく打ち出づる人は難きにてあるに、C 優に候ふものかな」とて、うちうめきたるに、人々みな入興して、Y 満座感嘆しけり。まことに、②とりあへずいひ出づるも、また聞きとがむるも、いと優にぞ侍りける。古今の歌に、

同じ枝を分きて木の葉の色づくは西こそ秋の初めなりけれ

と侍るを、③思はえていへりけるなるべし。

（『古今著聞集』より）

【注】
*後堀河院　鎌倉時代の第八十六代天皇。
*例幣　毎年九月十一日に朝廷から伊勢神宮に幣を奉納すること。
*職事　蔵人の総称。
*出御　天皇のお出まし。
*鬼の間　清涼殿の西廂の南端にある部屋。
*台盤所　清涼殿の一室で、女房たちの詰所。

＊内侍ども　内侍所に務めている女房たち。
＊渡殿　寝殿造りで、建物と建物とをつなぐ屋根のある廊下。
＊貫首　蔵人の頭の別称で、ここでは宣経のこと。
＊少将の内侍　女房の名。
＊御壺　壺のように小さく仕切られた前庭。
＊御剣の役　帝の剣を捧持する役。

問一　傍線部①「さらぬ」②「とりあへず」③「思はえて」の本文中の意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

①「さらぬ」
ア　いつもと違う　イ　重要でない　ウ　退出しない
エ　内侍ではない　オ　物語をしない

②「とりあへず」
ア　意味もなく　イ　たちどころに　ウ　間に合わせとして
エ　やる気もなく　オ　余裕もなく

③「思はえて」
ア　意外に思って　イ　気恥ずかしくて　ウ　自然と思い出して
エ　不自然に思って　オ　見栄を張って

問二　傍線部A「同じく」B「心とく」C「優に」D「なる」の品詞として適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。ただし、同じ記号をくり返し選んでもかまわない。

ア　名詞　　イ　動詞　　ウ　形容詞　　エ　形容動詞　　オ　連体詞
カ　副詞　　キ　接続詞　　ク　感動詞　　ケ　助詞　　コ　助動詞

問三　傍線部1「し」2「し」の活用形として適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。ただし、同じ記号をくり返し選んでもかまわない。

ア　未然形　　イ　連用形　　ウ　終止形　　エ　連体形　　オ　已然形　　カ　命令形

問四　「頭の中将宣経」「少将の内侍」「蔵人永継」「右の中将実忠」の各人物は、それぞれどこに位置しているのか。つぎの中から適切なものを選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　「頭の中将宣経」が渡殿に、「少将の内侍」「蔵人永継」「右の中将実忠」が台盤所にいる。
イ　「頭の中将宣経」「少将の内侍」が渡殿に、「蔵人永継」「右の中将実忠」が台盤所にいる。
ウ　「頭の中将宣経」「少将の内侍」が台盤所に、「蔵人永継」「右の中将実忠」が渡殿にいる。
エ　「頭の中将宣経」「少将の内侍」「蔵人永継」が渡殿に、「右の中将実忠」が台盤所にいる。
オ　「頭の中将宣経」「蔵人永継」「右の中将実忠」が渡殿に、「少将の内侍」が台盤所にいる。

問五　傍線部X「いづれの方にか候ひけむ」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　どちらかの庭に楓の木があったそうです。

イ　どちらの部屋に少将の内侍がいらしたのか。

ウ　どちらかの側の梢を御覧になったようです。

エ　どちらの方角に初紅葉があったのでしょうか。

オ　どちらの部屋の人々が感動したのでしょうか。

問六　傍線部Y「満座感嘆しけり」と人々が感動したのはなぜか。「秋」「西」「初紅葉」「古今の歌」の四語を用いて、三十字以上、四十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

●つぎの問題〔三〕は、文学部を志望する受験者のみ解答せよ。

〔三〕 つぎの文章は、趙括の伝記である。前半はその父趙奢の存命中の話であり、後半は父の死後の話である。これを読んで、後の問いに答えよ（設問の都合で返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

趙括自少時、学兵法、言兵事。以天下莫能当。①

嘗与其父奢言兵事。奢不能難。然不謂善。②

括母問奢其故。奢曰、兵、死地也。而括易言之。使括

趙括不将括即已。若必将之、破趙軍者必括也。

及括将行、其母上書言於王曰、括不可使将。

王曰、何以。対曰、始妾事其父。時為将、身所奉飯

飲而進食者以十数、所友者以百数。大王及宗

室所賞賜者、尽以予軍吏士大夫。受命之日、不

問ニ家事一。今括一旦為レ将、*東向而朝、軍吏無下

Z

仰ニ視之一者。上王所レ賜*金帛、帰蔵ニ於家一、而日ニ視テ*便利ノ田宅ノ可レ買者ヲ買レ之。③王以為何如其父。父子異レ心。願王勿レ遣。

（『史記』より）

【注】
*趙括　中国の戦国時代の趙の将軍。
*奢　趙奢のこと。趙括の父。戦国時代の趙の将軍。
*飯飲　食べ物と飲み物。
*宗室　君主の一族。
*東向而朝　上座について部下と対面する。
*金帛　金と絹。
*便利　手ごろな。

問一　波線部a「自」b「而」c「尽」の読み方を、送り仮名も含めてひらがなで解答欄に記せ(解答は歴史的仮名遣いでも現代仮名遣いでもよい)。

問二　傍線部①「以天下莫能当」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　世の中では将軍への登用を待望しないものはなかった。
イ　天下に自分にかなうものはないと自負していた。
ウ　世の人々はその能力のあることを疑わなかった。
エ　天下をひきいて功績をあげないことはなかった。
オ　世の中には経験の足りないことを心配する人がいた。

問三　傍線部②「然不謂善」とあるが、趙奢がそうした態度をとった理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　趙括は攻撃することにばかり熱心で、防御を軽視しているから。
イ　趙括は父の趙奢とは異なる流派の兵法を学んでいたから。
ウ　簡単に褒めると趙括がおごりたかぶることが予想されたから。
エ　趙括が将軍となって戦地にゆくことを阻止したいから。
オ　趙括が戦を軽々しく捉えている点を危惧したから。

問四　二重傍線部X、Yの「将」について、文法的に同じ用い方をしているものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。同じ記号をくり返し選んでもかまわない。

ア　自将三千人、為中軍（自ら三千人を将ゐて、中軍と為す）。

イ　遣将守関（将を遣はして関を守らしむ）。

ウ　唯将旧物表深情（唯だ旧物を将て深情を表はす）。

エ　人将死、其言也善（人の将に死せんとするや、其の言ふことや善し）。

オ　暫伴月将影（暫く月と影とを伴ふ）。

問五　空欄 Z に入る語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　再　　イ　漸　　ウ　敢　　エ　倶　　オ　嘗

問六　傍線部③の書き下し文は「王以て其の父に何如と為す」である。王に問いかけた母自身は、息子の趙括をその父趙奢と比べてどのような点をどう評価していたか、解答欄に記せ。

●つぎの問題〔四〕は、経営学部・人間環境学部・GIS（グローバル教養学部）のいずれかを志望する受験者のみ解答せよ。

〔四〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

冒険のスポーツ化は北極点にかぎった話ではなく、南極点だってそうだし、砂漠や海やジャングルもおそらく似たようなものだろう。

登山や極地など自然を舞台にした冒険は肉体を酷使してゴールに向かうことが多いので、どうしてもスポーツと同じだとみなされがちだ。事実、新聞社の冒険担当も社会部ではなくスポーツ部の記者が割り振られる。

しかし、本質的には冒険とスポーツは完全に対極に位置する行為だ。冒険というのはシステムの外側にある混沌とした未知の領域を舞台にした行為である。コロンブスの航海やナンセン*の北極海漂流をスポーツだとみなす人はいないだろうが、それは彼らの行為を評価するとき、必ず未知で予測不可能な世界に飛び込むという点に注目が行くからである。それに対してスポーツは競技場という名の舞台の整った管理された場でおこなわれる行為である。身体能力の優劣を競うわけだから、基本的にいつでもどこでも平等に同じ条件で実施されることが原則である。サッカーの試合だってフーリガンが暴れてスタジアムが混乱に陥ったら試合は成立しない。どのような状況で行為が成立するかを考えると、冒険とスポーツはまったく正反対の行為だということが理解できる。

ところが、その冒険が現代ではスポーツ化しているのである。これは冒険の危機を端的にあらわす現象だと私は考えている。今後、冒険を冒険としてとりもどすには、このスポーツ化を乗り越えたところで行為しなければならないだろう。

スポーツ化を乗り越えるためにも、まず冒険がスポーツ化する原因を解明することが必要だ。私が考えるに、その理由は大きく二つある。一つは、システム化の問題だ。北極圏は昔はシステム外の混沌領域だった。それが現代では情報通信テクノロジーと航空機の発達で一気に目に見えないシステムがおおいかぶさり、いつでもどこでも都合のいいときに外部とつながって

システム内部にもどれるという状況が出現している。それを考えると場の状況としては混沌ではなく整然とした競技場に近づきつつあるといえる。

しかも厄介なのは、自然環境だけ見ればシステム化の前と後では何ら変わっていないことだ。GPSがあろうと航空機で物資をはこんでもらおうと、北極海という環境自体は同じ状態でそこにある。目に見える世界は何も変化せず、ピ*アリーの時代と同じような北極に見える。つまり、システム化とは目に見えない裏側で進行している事態にすぎない。冒険がスポーツ化するポイントの一つはここだ。裏ではシステム化して、事実上、脱システム的な混沌はとりのぞかれているのだが、目に見える世界は依然として混沌としてシステムの外側にあるように見えるので、冒険者本人も、その人の冒険を見守る周囲の人たちも、意識のうえではその行為がまさしく冒険であるかのような［　A　］を得ることができる。本質を見れば自然環境は整然と管理された場に変わっているのに、あたかもそんなことはないようにふるまえる。安全なうえ、見かけも冒険っぽく、いいことばかりなので冒険はどんどんスポーツ化していく。

現代ではほとんど全地球規模でこうした①自然環境の競技場化が進んだ。サバイバル・レースなどはこの競技場化をフルに利用したスポーツだといえる。サバイバル・レースは砂漠やジャングルや海などを舞台におこなわれるので、一見冒険的に見えるが、主催者がいる以上、裏では選手の安全やコース設定やスケジュールがきちんと管理されており、その意味で完璧に競技場化している。だから分類としては冒険ではなくスポーツ、それも純度百パーセントのスポーツだ。

北極点到達行やエベレストの場合はそこまで完全に競技場化しているわけではないが、しかし、北極点到達行ではスタートからゴールまでの区間を恣意的にとり出して、そこだけで挑戦がおこなわれているわけだし、エベレストだってシーズンになるとガイドやシェルパ*が固定ロープをばしばし張って舞台づくりがおこなわれているわけだから、いずれも根本的なところでは競技場化しているといってさしつかえないだろう。ナンセン、ピアリーの時代は混沌とした自然のすべてを受けいれなければならなかったが、システム化した現代では行為の対象となる空間だけ都合よく切りとり、整備して、競技場化することが可能となったのである。

冒険がスポーツ化するもう一つの理由だが、それについてはシステム化とはまったくちがう視点から考察してみたい。ここで考えてみたいのは、冒険がスポーツ化する前提となるわれわれ内部の意識の問題だ。

スポーツ化した冒険に共通するのは何だろう。北極点到達行では陸地の北端をスタート地点、北極点をゴール地点として意図的に区切り、そこが舞台として設定されている。エベレストではベースキャンプがスタートで頂上がゴールだ。サバイバル・レースはそれこそスタートとゴールがそのつど設定されている。つまり、どの分野でも必ずスタートとゴールがあることは共通している。これは何を意味するのだろう。

答えを先にいえば、これらの行為はすべて、地理的にどこかに到達することをめざすことが前提になっている。さらにいうと、人間による②ほとんどすべての冒険行為はどこかに到達するという視点に縛られているということである。

人間は太古の昔からどこかに到達することをめざして拡散してきた生き物だった。十数万年前に出アフリカしてユーラシアに拡散し、陸続きだったベーリング陸橋をたどってアメリカ大陸へ拡散。小さくて粗末な船と経験知による航海術を駆使して太平洋に拡散。大航海時代にはスペイン人が新大陸に拡散。さらに近代をむかえてこれまで人類が到達できなかった極地やら砂漠やらの辺境への探検が可能になると、地球上の隅々に向けてさらに拡散した。その結果、地球上のあらゆる端の端、しわしわした地形の襞（ひだ）の中にまで足跡を残しつくして、人類が到達すべき場所はもう無くなってしまった。

ところが人間の本能として、どこかに到達したいという欲求が無くなるわけではない。その結果、どこかに到達する行為は、それはそれとして残されることになった。エベレストに登頂するという到達行為は残されたし、北極点をめざすという到達行為も残された。そして、そういうメジャーな目標には到達志願者たちが群れをなして押しよせるので、大衆化してシステム化して競技場化した。するとどうなるかといえば、到達志願者たちの中で必然的に競争心が芽生え、競技場化した自然環境の中でより高いパフォーマンスを示して自分たちのことを価値づけしようとし始めた。史上最年少だとか、最高齢だとか、日本人初とか、最速とか、冒険的にはあまり本質的とはいえない（記録）を次々と掲げ、身体的な能力が高いことを示すことで行為の価値づけをはかるということが普通になってきた。己の身体能力の高さを誇示しているわけだから、これはスポーツ競技以外の何物でもない。

このように冒険がスポーツ化する背景には、ゴールに到達するという地理的な視点が隠されている。人間は本能的にどこかに到達したいのだが、この現代においてはすでに新しくて価値ある到達点が無くなってしまった。じゃあ既存のゴールを使って、あとは内容で優劣を競おうじゃないかというのが冒険がスポーツ化する最大の要因だ。いいかえれば、ゴールの数が決まっている以上、到達するという視点に縛られているかぎり、スポーツ化して優劣を競う方向でしか発展のしようがない。

この到達主義的な傾向に明確な価値があたえられたのは近代に入ってからだろう。近代というのは進歩、前進、拡張、膨張の時代で、国家による近代的拡張精神の体現ともいえる植民地主義・帝国主義は、地球の皺(しわ)の皺まで到達しようという探検の精神が生み出したものだった。大昔の時代のイヌイットなんかは、もっと獲物の豊富な土地に行きたいとか、単なる個人的な好奇心といった素朴な理由から未知の土地に拡散したのだと思うが、近代の欧米人は科学の発展やら人類の知の増大やら経済の発展といった［　B　］の御旗(みはた)を立てて、新しい土地をめざして群がり、そして［　B　］の御旗という正義があるから、平然とその新しい土地で暮らしていた人たちを殺すこともできた。つまり探検してどこかに到達することが社会の発展のために圧倒的に価値あること、有用なこと、進歩だとされたのが近代という時代だった。

地理的な一点に到達するという視点の裏には、こうした近代の思考が見え隠れしている。学問や文学や芸術の分野では近代の限界やうさん臭さが指摘されて何十年にもなるのに、冒険の分野では未だに③近代的視点に縛られ、どこかに到達することに縛られ、そこから脱却できずにいる。

冒険がスポーツ化する本質的な要因は、地理的な到達点しか対象を見つけられないからだ。どこかに到達することに縛られているかぎり、冒険は最終的にはスポーツ化するよりほかに道はない。しかしスポーツ化は舞台の競技場化が前提なので、方向性としては脱システムとは対極である。スポーツになればなるほど、それは冒険では無くなるのである。そうであるなら、冒険が④冒険であることをとりもどし、脱システムするには、どこかに到達するという視点から解放されなければならない。地理的、空間的な価値観を離れて、新しい別の脱システム的可能性を拓かなければ、今の時代、冒険をおこなうことは難しくなっている。

（角幡唯介『新・冒険論』より。文章を一部改変した）

【注】 ＊ナンセン　十九世紀後半～二十世紀前半のノルウェーの探検家。北極探検の計画と実行で有名。
＊ピアリー　十九世紀後半～二十世紀前半のアメリカ合衆国の探検家。初めて北極点に到達した。
＊シェルパ　ネパールの少数民族の一つで、よくヒマラヤ登山隊の案内をつとめる。

問一　空欄 A ・ B に入る語として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

A　ア　安楽　イ　虚構　ウ　錯覚　エ　自信　オ　信頼

B　ア　綾　イ　菊　ウ　黄金　エ　錦　オ　紫

問二　傍線部①「自然環境の競技場化」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　大自然の危険な部分をさりげなく加工し、冒険者に命の危険がないことを保証した環境を整備すること。

イ　自然環境には手を加えることなく安全なルートを選んでおき、冒険者も予行演習を含めて、その場に繰り返し通うこと。

ウ　過酷な自然環境に対して、冒険者が最新のテクノロジーにより危険に遭っても生き残れる装備をして臨むこと。

エ　冒険の場となる自然環境が、情報通信技術の高度化で安全性・確実性を高められ、日常生活圏とつながっていること。

オ　自然環境を加工し、遊園地のアトラクションのように、適度に危険や辛苦を疑似体験させる趣向をひそかに凝らすこと。

問三　傍線部②「ほとんどすべての冒険行為はどこかに到達するという視点に縛られている」とあるが、それがなぜスポーツ化につながるのか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　現代の冒険行為では、到達点までの道程を、科学技術に支えられたシステムを用いてスポーツの競技場同然に管理することになりやすいから。

イ　現代では未知の到達点がほぼ無くなっているため、冒険行為でも既にある到達点を用いて、スポーツのように身体能力の優劣を競う方向に進みやすいから。

ウ　未知の場所への到達を求めるのは人類の生まれ持った本能であり、それに挑む冒険行為が、未踏の記録をめざすスポーツの本質と重なるから。

エ　冒険者が身の危険も顧みずにあえて過酷な自然環境に挑むことで自己の限界を破ろうとする点が、スポーツの精神に通じるから。

オ　どこかに到達する冒険行為が、自ずと個人のみならず国家間の競争を促す点が、オリンピック等のスポーツ競技に似てくるから。

問四　傍線部③「近代的視点」とあるが、つぎの中から筆者が考える「近代的視点」による思考や行為に**あてはまらないものを二つ選び**、解答欄の記号をマークせよ。

ア　都市文明を批判し自然回帰を賛美すること。

イ　経済的な発展が人類を幸福にすると信じること。

ウ　より暮らしやすい場所を求めて移住すること。

エ　新たな領土の獲得は国を豊かにすることだと考えること。

オ　科学的知見を実地踏査により実証しようとすること。

問五　傍線部④「冒険であること」とあるが、つぎの中からこれにあてはまると判断できる具体例を一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　GPSと天気予報だけを頼りに、隊は組まずに単独で南極に向かう。

イ　砂漠で、近代的装備を捨てて生身の人間として体力を競い合う。

ウ　海で酸素ボンベを背負わずに、水深何メートルまで深く潜れるかに挑戦する。

エ　万が一、生還できないことも覚悟して、アマゾンの過酷なサバイバル・レースに参加する。

オ　海洋民の伝統的な航海術と経験知に学び、それを実践してあてどもない航海を試みる。

問六　筆者は、スポーツ化しない冒険とはどのようなものだと考えていることが読みとれるか。「システム」「到達点」「ゴール」の三語は**使わないで**、三十字以上、四十五字以内にまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。